

(様式)

令和4年度 学校評価 学校関係者評価書

学校名	三木市立緑が丘中学校
-----	------------

1 学校教育目標

自ら考え 正しい行動のできる 心豊かな生徒の育成

2 本年度の重点目標

(1) めざす学校像	① 安全で安心して過ごせる学校 ② 思いやりにあふれ、人権への配慮が行き届いた学校 ③ 自主的・意欲的な活動を通して、子どもたちが自己実現できる学校
(2) めざす生徒像	① 知・徳・体の調和がとれ、自立して自らの夢や志の実現に努力する生徒 ② 自分を大切にするとともに、友だちの喜びを自分のことのように喜べる生徒
(3) めざす教師像	① 確かな人権感覚を持ち、子どもたちに寄り添い、伸ばす教師 ② 子どもたちの自己実現を助け、自立した子どもたちを育てる教師

3 自己評価結果(達成状況)【 A:達成している B:概ね達成している C:あまり達成していない D:達成していない 】

評価の観点	評価項目(取組内容)	取組(達成)の状況	評価	改善の方策
学習指導	①学力向上のためのわかる授業づくり ②補充学習や家庭学習の充実による基礎学力の定着	①授業でのタブレットの活用について実践的なショート研修を行った。 ①週30コマを基本とする運用で授業時数は確保することができた。 ①少人数授業やわかる授業づくりについてのアンケート項目は生徒評価の目標を達成した。 ①ICTを活用した個別最適な学びについてはまだまだ工夫を要する。 ②夏季休業中やテスト前に補習を行い基礎学力の定着を目指した。 ②夏季休業中の課題を精査し、自分たちで考え課題に取組ませた。	A	①研修で学んだことを授業で生かす機会を増やす。 ①個別最適な学びを実現するための工夫を行う。 ①AIドリルの活用など、ワークブックの電子化を図る。 ②夏季休業中だけでなく、普段から自分で考え学習する習慣を身につけさせる。 ②家庭と協力し、自ら学習に取り組む習慣をつける。
生徒指導	①予防的生徒指導の充実 ②いじめ対策、不登校対策の充実	①情報モラル講演会、薬物乱用防止講演会を開催した。 ①いじめアンケートおよび個別面談等は計画に沿って実施することができた。 ①生徒に考えさせ、実態に即したきまりの見直しを行うことができた。(継続中) ②教育相談旬間、教師と生徒と信頼関係の構築、休み時間等の見守り等により、いじめの早期発見・早期対応ができた。 ②教師、SC、SSW、関係機関等が連携して、生徒・保護者の気持ちに寄り添いながら支援することで、状況の改善につながった。	A	①3年間を見通して、計画的に講演を実施し指導を行う。 ①生徒が相談しやすい環境づくりに努め、生徒の背景に目を向け情報交換を迅速に行う。 ①コロナ禍をよき機会と捉え人権の視点を重視し、規則の見直し等自ら考え、判断する力を身につけさせる。 ②不登校の原因の複雑化・多様化により、対応が難しいケースが増加している。専門家や専門機関とのさらなる連携のもと、チームとして生徒・保護者の支援を行う。
特別活動	①生徒の主体的な活動の推進 ②各種行事の活性化	①ソーシャルスキルトレーニング等、各学年の実態に即した活動を行った。 ①②生徒会を中心に、コロナ禍での行事の実施を模索し、取組んだ。 ②感染症対策をとり規模縮小となったが体育祭、文化祭を全校生で実施した。 ②小中連携(授業交流、情報共有、交流会、出前授業、授業見学など)積極的に推進した。	B	①年度初めに目標を明確にした上で年間計画を作成し、計画的に指導する。 ①生徒の学校運営に参画しようという意識を高めるとともに、意見やアイデアを積極的に取り入れる。 ②これまでのやり方にとらわれず現状に即した内容を協議し、行事を実施する。
道徳教育 人権教育	①道徳教育の充実 ②人権意識の向上	①ICTの活用をテーマに校内研修会を実施し、研修を深めることができた。 ①ローテーション授業の実施により、教師の授業力向上につながった。 ②6月、11月に週ごとに重点テーマを設定して人権強化月間を実施した。 ②オンラインを活用するなど工夫して、人権作文発表会を実施した。	B	①互いに授業参観を行ったり意見交換するなど多様な授業法の研修により、生徒がより深く考えられるような授業をめざしていく。 ②違いを認め、互いを大切にすることを醸成する。 ②志染地区の人権課題について緑が丘中で理解を広める取組を小中で連携しながら推進する。
特別支援教育	①支援を要する生徒の理解と支援の充実 ②交流を通じた学びの充実	①学級担任や特別支援教育指導補助員が情報共有し、急な時間割変更等にも対応し、支援の充実を図ることができた。 ①支援を要する生徒の状況について年度初めに情報共有し共通理解した。 ①受験に向け、きめ細やかな情報提供と対応ができた。 ②コロナ禍のため交流の機会は減少したが、市内合同遠足に参加し、紙飛行機大会や美術館見学など共に学ぶ機会を設けることができた。	B	①支援を必要とする生徒への対応を充実させるとともに学習や生活上の困難を改善・克服する態度を養う。 ①生徒や保護者の願いに寄り添い支援をすすめる。 ②今後の感染状況を見ながら、オンラインを活用だけでなく工夫して交流を進めていく。
家庭・地域との連携	①家庭との連携強化 ②学校からの情報発信や学校公開による開かれた学校づくり	①体育祭、オープンスクール2回、文化祭等を実施することができた。コロナ禍の中分散して少しでも来校してもらう機会を増やすことができた。 ①入学説明会等、各種説明会を実施することができた。 ②学校行事等を学校通信や学校ホームページ等で発信することができた。 ②公民館行事等に吹奏楽部や生徒会が参加することができた。	B	①新型コロナウイルス感染防止対策を続けながら、学校行事に保護者や地域の方に来校してもらうように工夫する。 ①保護者連絡システム「すぐーる」等で学校行事等について早めに知らせるようにする。 ②保護者や地域の方の学校行事への参加や生徒の地域活動への参加について検討する。
教職員の育成 (教頭)	①研究授業・研修会の充実 ②生徒理解に努める教職員の育成	①ICT機器を使った「個別最適な学び」や「協働的な学び」の実現を目指した校内研修を行ったが十分ではなかった。 ①講師を招聘して道徳の授業研究を実施し、教員の資質向上を図った。 ①学力向上三木モデルのねらいの理解とその実現に向けて具体的方策を十分にとることができなかった。 ②生徒指導委員会、不登校対策委員会を定期的に行うとともに工夫して全教職員で情報共有した。 ②サポート教室の運営や保健室対応の担当を、時間割の中に組み込み、漏れのない対応を通して教職員の意識が高まった。	C	①引き続きICT機器の効果的な学習方法について校内研修を行い全教職員のスキルを高める。 ①学力向上三木モデルのねらいの理解とその実現に向けて研究授業を計画的に進め教員の資質向上を図る。 ②生徒の家庭環境や友人関係などの背景や内面を理解し、生徒一人ひとりの個にあった生徒指導対応能力を高めていく。 ②不登校生徒に対する支援について、SC、SSWとうと協働して取り組む。

4 自己評価方法の適切さについての学校関係者評価

・アンケート回収率が約90%(生徒337名/365名、保護者306名/365名、教職員31名/31名)であり、学校全体の意見を反映している評価書と考えられる。
・評価書とは別に「チェックリスト」を作成し、評価項目を細分化し、達成状況等を分析している点は評価できる。
・個別のアンケートを実施するだけでなく、三者比較も行っており、評価の相違を考えながら評価している点は評価できる。
・記述式アンケートを実施し、数字だけではわからない保護者等の意見を集約し、評価に活かすとともに、それらの意見に対するレスポンスを学校通信で伝えたことは評価できる。
・三者アンケート結果の昨年度のデータがあれば、比較がしやすく、なおわかりやすく評価できると考える。
・評議員に対し、学校の取組に関する説明が丁寧に行われ、大変評価しやすかった。

5 評価の観点ごとの学校関係者評価

学校自己評価結果及び改善の方策の適切さについての評価
・評価Aは妥当である。 ・ICT(タブレット端末・電子黒板など)を活用した授業を積極的にやっているが、学校側はタブレット端末が万能でないことやプリント・デメリットを理解しながら、授業を行う姿勢がある。次年度もそれらを考慮しながらICTを用いた教育活動を行っていただきたい。 ・長期休業中などに補習を行い、基礎学力の向上への取組を行っていることは評価できる。今後はさらに個々のレベルにあった学習活動が必要となると感じる。 ・自主学习時間の確保のために行った宿題・課題の減少が、授業を含めた学習時間の減少につながることはないよう対策をお願いしたい。
・評価Aは妥当である。 ・現代の小中高生間で問題となっている「情報モラル講座」や「薬物乱用防止講演会」を3カ年の計画を立て、実施している点は評価できる。 ・いじめアンケートを実施するとともに、結果を基に二者面談を行い、アンケートではわからないことを理解するように心掛けている点は評価できる。 ・家庭と教師だけではなく、SC、SSW、専門機関と協力し、不登校生や登校しにくい生徒に対する現代に合ったフォローアップ体制が構築されている点は評価できる。
・評価Bは厳しいと感じる。行事の「数」はコロナ禍で減少したが、行事の「質」は高く感じた。評価Aに近い評価Bと考えられる。 ・コロナ禍での学校行事の在り方を学校側だけで決めるのではなく、生徒を中心に実施方法を考えさせることにより、生徒の主体性を育てている点は評価できる。 ・次年度以降はコロナによる制限が緩和されることが予想される。コロナ前とコロナ禍により新たに実施された内容を比較検討し、よりよい学校行事が展開されることを期待する。
・評価Bは妥当である。 ・学校全体でICTの活用、ローテーション授業、人権強化週間など様々な形態で道徳・人権教育を行っている点は評価できる。 ・第3学年生徒を対象に部落差別に関する講演会を行っている。社会の学習内容と小学校や地域と連携した取組により、生徒の人権意識の向上に努めている点は評価できる。 ・LGBTQに対する学習は今後、重点的に取り組むべきの課題であると考えられる。
・評価Bは妥当である。 ・支援を要する生徒に対して、学級担任のみで対応するのではなく、補助員や他の教職員が連携することにより、手厚い支援体制が構築されている。このことは生徒・保護者は心強く感じていると考えられる。 ・三木特別支援学校との対面交流はオンラインでは学ぶことができない体験ができていると考えられる。今後も継続していただきたい。
・評価Bは妥当である。 ・地域の公民館で行われている文化祭など、地域とのつながりを大切に活動が徐々に増えていることは感謝したい。生徒の地域を大切にすることを怠るには欠かせないと取組であると考えられるので、継続をお願いしたい。 ・学校通信や学校HPを活用した情報発信は定期的に行われている。次年度以降は学校行事やオープンスクールに地域の方々や保護者が参加できる状況になると考えられる。学校の取組を存分に公開していただきたい。
・評価Cは厳しいと感じる。教職員は多忙な中、放課後や長期休業中などに研修会や授業研究を行い、資質向上に対する取組は定期的に行われており、評価Bに近い評価Cであると認められる。 ・「ギガスクール構想」、「学力向上三木モデル」などの新たな学習形態の導入により、さらなる教員研修が必要となるが、教職員の勤務時間の適正化など、教職員が時間的・精神的に余裕を持つことにより、生徒への対応も丁寧に行えると思われる。無理のない研修計画を立て、効率よく、施策の理解と具体的方策を構築していただきたい。